
† 死神に、花束を †

聖なる写真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十死神に、花束を十

【Nコード】

N0175F

【作者名】

聖なる写真

【あらすじ】

彼女は今日も何かを求めてさまよう…あなたの周りにこんな人はいませんか…？

（前書き）

初ホラー挑戦

アドバースがあるとうれしいです

＋1日目＋

今日も私は夜の闇の中を歩く
自慢の黒い髪を風に揺らしながら

今日こそは“彼”に逢えるのだろうか

わずかな期待と不安を漂わせながら進む

「おい、 その君」

不意に警官に呼び止められる
ここで抵抗するのはバカらしいので、
立ち止まり振り返る

「はい、 为什么呢うか」

「いや、　ここらへんに最近通り魔が出没しているだろ？」

君みたいな黒くて長い、　綺麗な髪を持つ娘ばかりが狙われているから気をつけなさいと言おうと思って……」

「ええ、　分かってます

だけど“彼”に会いたいですから」

「……“彼”？」

思った通り

警官は怪しいと思ったのか不信げな顔をする

仕方ない、　教えてやるか

「想い人なんです

こんな漆黒の闇が似合いそうな……」

嘘は言っではないない

「は、　はあ……

まあ、　気をつけなさいよ」

「分かりました」

それ以上は突っ込まず、警官は私とは別の道に行く

少し安心した

前はしつこく聞かれたので、大声を上げるしか手がなかったのだ

警官が去ったあとも、もう少し探索してもよかったが
また、警官に出会つと怪しまれるので今日はこれで終わりにしよう

＋2日目＋

この日は雨が降り続いていた

雨は好きだ

夜の雨は言っまでもない

“彼”の“存在”がさらに一層濃くなるからだ

白い雨傘を差しながら、夜道をぐんぐん進む

と、

「ぎゃあああああああああああああああああああ……！！！！！！」

響く悲鳴、 品のない女性の断末魔
その先へと私は走り出す

その角を曲がるとそこにあつたのは朱に染まつた女性の死体

全身を鋭い刃物で切り刻まれ、 その出欠量でもはや息絶えている
のが分かる

そして、 肺への一突き

最近ここを騒がしている通り魔の手口だ

このまま放っておくわけにもいかまい

私は携帯電話を取り出すと警察へと電話をかけた

どうやら今日も探索はここまでようだ

最近、 よく邪魔される

私は知らず知らずの内に足を小刻みに動かしていた

十3日目十

「だからさあ……お前が殺ったんだろ？」

「違います。何回言ったら分かるんですか？」

「そもそも私は刃物の類いは持つてなかったじゃないですか」

「じゃあ、なんで毎晩夜中にさまよってたんだ？」

「獲物を捜していたんだろ？」

「正直に言っと、あなた頭悪いですね」

「私は刃物の類いはまったく持つてなかったんですよ」

「どうやって彼女の身体を切り刻むことができるんですか」

まったくこの刑事の頭の悪さに呆れてしまう

私の言葉にイラついたのかその中年の刑事は勢いよく机を叩く

「ふざけるな！！ お前じゃなきゃ誰が殺るんだ！！ ああ！？」
「……………」

あまりのバカバカしさに無言になる

それを降伏と見たのか中年刑事は得意顔になる

くだらない

「大山さん」

若い刑事が中年刑事を呼ぶ

そしてなにか話し合う

どうやら、 新たな通り魔殺人がおきたようだ

その後に私はようやく釈放になった

空には美しい夜明けが浮かんでいた

悔しいが今日は探索ができなかった

明日は出逢えるだろうか

“彼”に

十4日目十

今日は“彼”に出逢えそうな気がする

刑事が来たら困るがその心配をしているひまはない

あの通り魔は大分追い詰められている

背後からの声で我に返る

それが、私の最大の油断だった

鋭いナイフが肩を貫く

そのまま壁に押しつけられ、腹にナイフが入る

肩を斬られ、腹を抉られる

私は確信した

この男が通り魔だ

やっと出会えた

“彼”への鍵を握る者

見ていると左腕を斬られた

次に逃げられぬように両足に無数の裂傷を入れる

そんなことをしなくても私は逃げる気はないのに

肺に突きが入る

ゴボリと血泡が私の口からこぼれる

視界が暗くなる

感覚が、 痛覚が鈍くなっていく

この瞬間を望んでいた

彼がナイフを振り下ろすと、 私の意識は闇に堕ちた

＋5日目＋

「うん
うん……」

こ、ここは……？」

私の部屋……？

天井を見上げて、私はあることに気がついた

“また”か……

もう、これは何回目だろう……

仕方がない

私は身体を起こし、服を着替え、TVをつける

『……昨夜、若い男性の死体が発見されました

全身を切り刻まれ、肺への一突きがあることから警察は通り魔事件と関連性があると視ていますが

凶器となったものが彼自身が所持していたナイフと同じものだったので、警察はそれも関連づけて捜査する方針です』

「またか………」

TVを消して私は呆れ果てた

仕方がない、　また“鍵”を探そう

玄関を出ると、　隣のおばさんが掃除をしていた

「あれ？　髪型を変えたのか？」

「え、　あ、　ハイ」

彼女に言われて私は髪がロングからショートになっているのに気がついた

「振られたんですよ」

「またかい？」

「ええ……でも、　諦める気はまだありませんよ」

「そう？　まあ、　頑張りな」

そう、　まだまだ諦めない

“死神”が振り向いてくれるまで

私は永遠に生き続けるのだから

(後書き)

もうちょっと、
感想ください

残酷にしてもよかったかなあ
…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0175f/>

† 死神に、花束を†

2010年12月4日10時57分発行